



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	長谷川雄太郎研究：『日語楷梯』と『日語入門』草稿の校合に基づいて
Author(s)	中村, 重穂
Citation	北海道大学国際教育研究センター紀要, 20, 66-80
Issue Date	2016-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65696
Type	departmental bulletin paper
File Information	JISCHU20_nakamura.pdf



長谷川雄太郎研究

－『日語楷梯』と『日語入門』草稿の校合に基づいて－

中 村 重 穂

長谷川雄太郎研究

－『日語楷梯』と『日語入門』草稿の校合に基づいて－

中 村 重 穂

要 旨

小論は、明治期・清末の日本語教師・長谷川雄太郎の手になる二つの教科書『日語楷梯』と『日語入門』草稿を書誌学的に分析して考察し、その成立順序を明らかにすることを目的としたものである。劉（2005）は、これらについて『日語入門』草稿が先に執筆され、『日語楷梯』はそれを改訂したものであるという見解を示している。この見解の当否を確かめるべく、両者の相違箇所を抽出した上で、明確な書き換え・削除の指示を伴う箇所を対照してみた結果、『日語楷梯』に書き込まれた指示は『日語入門』草稿で具現化しており、また、『日語入門』草稿の指示は8箇所中6箇所が具現化していることが分かった。その他の2箇所については長谷川が編集過程で削除を指示したものと解釈できることを示し、これらから劉の見解とは逆に『日語楷梯』が先に執筆され、『日語入門』草稿はそれ以後に成立したものであると結論づけた。また、ページ数と標題・編著者名の欠落という特徴から、『日語楷梯』は、さねとう（1960）が挙げている未確認の1900（明治30）年刊『日語入門』であるとも考えられることを指摘し、これについて検討する必要があることを述べ、さらに未確認史料の探索と書誌学的研究の継続を今後の課題として挙げた。

【キーワード】 長谷川雄太郎、『日語楷梯』、『日語入門』

1. 問題の所在

長谷川雄太郎（1865（慶応元）年～1904（明治37）年）は、明治時代（清朝末期）に清国・広州同文館で教鞭を執った日本語教師であり、日本語教科書として『日語入門』（初版1901（明治34）年）を著している。筆者は、長谷川家のご厚意により同書の草稿を含む諸資料を閲覧・複写させて頂くことができ、日本国内に現存する諸本（長谷川家所蔵本を除く）¹⁾と草稿

との校合を行ってその結果を中村（2015）で明らかにした。

しかしながら、中村（2015）では『日語入門』そのものの成立過程を説明するには至らず、これを後日の課題とした。この問題に関しては、劉（2005：234-235）に次のような記述がある。

「現在長谷川家には、1901年以降広州同文館で使われたと思われる『日語入門』の手稿本が2種類残され、雄太郎が『日語入門』の改訂のために作成したものと考えられる。それにより善隣書院刊本の欠頁を補うことができる。2種類の手稿本は、単語編に宮室・家具・化粧道具・食事道具・文具・農工商具・服飾・飲食・野菜・果物の諸項目の中に日常生活に密着した単語を500個程度増やし、「造語篇」の説明や翻訳に多少添削を加えたほかは、内容がほとんど変わっていない。ただ、そのうちの1種類は第八十七から第九十までの「挨拶」や「称呼」のようなまとまりの悪い部分を削除し、『日語楷梯』という新しい書名が付けられている。」

この引用中、「善隣書院刊本」と書かれているのは、現在東京都立中央図書館特別文庫室実藤文庫に所蔵されているものであるが、劉が述べているように前半の語彙の部分の欠落がある。この実藤文庫本を他の刊本と比較すると、劉が上で述べている「宮室・家具・化粧道具・食事道具・文具・農工商具・服飾・飲食・野菜・果物」がまさに欠頁になっている部分である。長谷川家所蔵の2種類の手稿本はこれらの欠損部分を完備しているが、それは劉が言うように『日語入門』の改訂のために作成し「日常生活に密着した単語を500個程度増やし」たものではなく、実藤文庫所蔵本の方に落丁・乱丁が生じているものであることは、筆者が既に中村（2015：9-10）で確認・報告しておいた。

劉は、さねとう（1960：62）の、現在までのところ未確認の1900（明治33）年刊行の『日語入門』があるという記述を出発点として、実藤文庫所蔵本を「増訂版」〔劉（2005：232）〕と位置づけ、長谷川家所蔵の2種類の手稿本をこの「増訂版」の準備稿と見做し、それらをもとに1901（明治34）年刊行の『日語入門』が成立したという過程を考えていることが窺える。さらに、先の「1種類は第八十七から第九十までの「挨拶」や「称呼」のようなまとまりの悪い部分を削除し、『日語楷梯』という新しい書名が付けられている。」という部分を読む限り、2種類の手稿本のうち、『日語楷梯』は『日語入門』草稿よりも後に成立したものであると考えていることも判

る。

これらの見解のうち前者について筆者は、中村（2015：7）で一定の留保が必要であることを述べておいたが、後者については『日語楷梯』と『日語入門』草稿との校合を行っていなかったため、判断を下すことができなかった。特に、上述のように劉が『日語楷梯』を『日本語入門』草稿に一定の改稿を施したものと推定している以上、これらを比較考量し、劉の言う「まとまりの悪い部分」の削除だけでなくそれ以外にもどのような書き改めや誤記・誤植が生じているかを明らかにすることは、テキストの成立過程とその編集意図を知る上で必要な書誌学的考証手続きとなる。また、そのような手続きを通して、後者の、『日語楷梯』と『日語入門』草稿の前後関係の当否についても解明の手がかりが得られることが考えられる。

このような見地に立った時、一つの疑問が生じる。ここまでの劉の見解では「1900年刊『日語入門』→『日語入門』草稿→『日語楷梯』→1901年刊『日語入門』」という成立過程があったことになるが、現存する5冊（長谷川没後に刊行されたものも含む）の『日語入門』は全て『日語楷梯』で削除されたはずの第八十七から第九十の課を含んでいる。これらのことから考えると、『日語楷梯』は、1901年刊『日語入門』（劉の言う「増訂版」）の作成には利用されなかったことになる。しかも、中村（2015：7）で述べたように、『日語入門』草稿、及び1901年刊『日語入門』から現在確認できる最後の版である第六版まで誤植・誤記・脱字や句読点・ルビ・傍線・ルビの有無等の微細な相違はあるが文（章）の書き換えはないので²⁾、『日語楷梯』が「増訂版」以降の『日語入門』の原稿となったと考えることも不可能である。この点をどのように考えたらよいのであろうか。

小論は、この点に解答を与えるべく『日語入門』草稿と『日語楷梯』の校合を行って相違点を明らかにし、これらの成立順序を考察することを目的とする。以下、『日語入門』草稿は草稿、『日語楷梯』は楷梯と略記することとする。また、各課の番号は原本では漢数字であるが小論では以下アラビア数字で表記し、原本の縦書きを横書きで表記し、旧漢字旧仮名遣いについては漢字のみ新漢字で表記することとする。

2. 草稿と階梯の校合

2.1 書誌情報

草稿の書誌情報については中村（2015）に書いたので、ここでは楷梯に

について述べる。楷梯は草稿と同じく、現在神奈川県横浜市の長谷川家に所蔵されている。本体は紙縫りで綴じられた綴りの束から成る草稿とは異なり、刊行された諸本と同じく四ツ目綴じ和装本で、縦は24.1cm、横は歪みがあるため正確には計りにくい約15cmである。標題はなく、本文最終ページに「日語楷梯完」と書いてあることから本書の名称が『日語楷梯』であることが分かるようになっている。

ページ付けは全くなく、本文のページ数は180ページであるが、138ページ目のみ空白となっている。これについては、草稿や『日語入門』諸本と比較しても137ページ以降の本文の欠損・脱落がないので、このページだけが空白となっている理由は不明である。

また、43ページ目で語彙項目「職業」が始まっているが、次の44ページ目は職業とは関係ない「金 銀 鉄 銅」で始まっている。この部分を草稿と校合すると、「職業」の後半部分と語彙項目「舟車類」、及び「金石類」標題が欠けていることが判る。この落丁が発生した理由も不明であるが、楷梯を綴じる段階で脱落したものと推察される。

180ページ目の本文の後に、上述のように「日語楷梯完」と書いてあり、その次に1葉遊び紙が付いている。各ページとも草稿より行数が多く、草稿では原則として1ページ6行で書いているが、楷梯では概ね1ページ10行、多いものでは15行程度で書いている。ページ順序については、草稿の綴りに見られたような配列の混乱は見られない。

ただ、128ページ以降最終ページまで本体下部（背の綴じてある部分の下部）の破損が激しく、開いた場合に一部ページでは書かれてある文や語が判読不能となっている。

2.2 校合について

中村（2015）では、草稿と諸本の校合に於いて改行位置等レイアウトの違いを相違点に含めたが、今回の楷梯と草稿の校合に当たってはレイアウトの違いは対象から外した。その理由として、本文中の語彙についての語釈・説明等の記入位置が楷梯では不統一であることに依る。草稿では語釈・説明等は全てページ上部に書かれているのに対し、楷梯では第60課までは殆どが本文の下か脇に書かれ、第61課から草稿と同じくページ上部に書かれるようになっている。

また、特に本文に付された訳文について、草稿と楷梯の間に文字・語単

位で2箇所以上の変更や修正がある場合、これを文字の修正とするか、訳文自体の変更・修正とするか、判断に迷う箇所があった。例として以下の訳文を示す。

楷梯第79課：「你到了幾多歲」⇔草稿第79課：「你有了幾歲了」

これについては、原則として訳文自体の変更・修正として相違箇所数に入れたが、読点等の軽微なものの加除については語・符号の修正としたものもあることを断っておく。

さらに、本文や訳文、語釈等の一部に上述の破損箇所があり、かつそれらの文が相違箇所を含む場合は、読解可能な部分の相違箇所数を数え入れておいた。そのため、もし破損がなければ、後掲の相違箇所はなお増えた可能性があることを付言しておく。

2.3 校合の結果

階梯と草稿を校合した結果、1,512箇所の相違が認められた。しかし、その全てを示すことは紙幅の制約上不可能であるため、これらを同種の相違毎に35の項目に分け、各項目の相違箇所数を後掲の表1に示す。

表1の35項目については、項目が煩瑣に渡ることを避けるため、より細かく項目分けできるものを一つにまとめた場合もある。例えば、順位4番目の「訳語/訳文が相違」は、中国語訳が全く異なる場合のみでなく両者の間で訳文の一部が削除されている場合も含んでおり、また、順位10番目の「階梯で変更・修正された語/文が草稿と同一」は、内容の変更のみでなく単純な誤記修正の場合も含んでいる。

表1では「その他」が53箇所と多くなっているが、その殆どは括弧の有無、階梯で二重線となっているものが草稿では傍点になっているもの、階梯で傍点となっているものが草稿では傍線となっているもの等所謂約物の相違であり、それら以外にごく僅かに階梯で一度削除したものが再掲されそれが草稿と同一となっているものが含まれている。

これらの項目中「階梯にない語/文が草稿にあり」が最多となっているのは、階梯前半の語彙一覧の項目に、草稿にはある「草木」、前述の「職業」後半部分、「舟車類」、「金石類」標題、第87～89課の挨拶表現、及び第90課の対人呼称類がないことに依っている。また、「階梯にある語/文が草稿にはなし」がこれに次ぐのは、階梯66課後半から73課見出し語6番目まで草稿のページが脱落していることに依る。

表1：楷梯と草稿の校合結果（相違箇所）

順位	項 目	相違箇所数
1	楷梯にない語/文が草稿にあり	250
2	楷梯にある語/文が草稿にはなし	203
3	楷梯には句読点がないが草稿にはあり	167
4	訳語/訳文が相違	123
5	楷梯にはルビがないが草稿にはあり	113
6	楷梯では語に傍線がないが草稿ではあり	102
7	楷梯では語に傍線があるが草稿ではなし	67
8	文法・語釈等説明が相違	53
9	楷梯でルビが削除され草稿にはなし	36
10	楷梯で変更・修正された語/文が草稿と同一	32
10	同一訳語を草稿で修正・削除	32
10	楷梯と草稿で傍線が左右逆	32
13	草稿で訳語・訳文修正	30
14	楷梯には文法・語釈等説明があるが草稿にはなし	29
15	楷梯で削除・修正された訳が草稿と同一	28
16	楷梯にはルビがあるが草稿にはなし	23
17	楷梯では語に傍点がないが草稿にはあり	20
18	文字が相違	15
19	楷梯には訳があるが草稿にはなし	13
20	楷梯には訳がないが草稿にはあり	12
20	楷梯には文法・語釈等説明がないが草稿にはあり	12
22	楷梯で加除指示した語/文が草稿で指示通りに記載	10
22	楷梯では読点であるものが草稿では句点	10
22	読み取り不能箇所	10
25	語/文の順序入れ替え	9
25	楷梯には句読点があるが草稿にはなし	9
27	楷梯の文が草稿では変更	5
28	楷梯で修正されたルビが草稿と同一	4
29	送り仮名が相違	3
30	楷梯には語に傍点があるが草稿にはなし	2
30	標題が楷梯になく草稿にあり	2
32	編著者が楷梯になく草稿にあり	1
32	楷梯で変更・修正された語/文が草稿では変更・修正前の原文	1
32	楷梯でルビが削除されているが草稿にはあり	1
35	その他	53
	総 計	1,512

以上は、語・文の相違と言うよりもテキストの欠落と言うべきものであり、実際に相違している語や文について見てみると、総数1,512箇所から上記2項目と「その他」を引いた1,006箇所中最も多いのは、ルビと約物に関する相違（順位3、5、6、7、9、10、16、17、22、25、28、30、32）で、合計586箇所（58.3%）を占める。次いで訳語・訳文に関する相違（順位4、10、13、15、19、20）が238箇所（23.7%）、文法・語釈等の説明に関する相違（順位8、14、20）が94箇所（9.3%）となっている。そして、本文自体の変更等による相違（順位10、25、27、32）は47箇所（4.7%）のみである（文字の変更は含まず）。

これらを見る限り、訳語・訳文については（階梯と草稿のいずれが先行したにせよ）長谷川が一定の推敲を重ねたことが窺える。同時に、ルビと約物に関しては相違箇所が多いが、それは書式に統一性を求めたためであるとは言いがたく、異なった書式が混在している（→結果的に混在するように書き直しをしている）箇所が認められる。一例を挙げると、階梯・草稿の第34課最終文「私ハ本ヲ読ムコトガ一番好キデアリマス」の「コト」に傍線が付されているが、この傍線が階梯では原文縦書きの行の右側に書かれているのに対して、草稿では右側に書いた傍線を消して左側に書き直されていることが判る。ところが、この傍線左側という書式は草稿では徹底されず、第36課冒頭文「君ハ何ガキラヒカ」では「キラヒ」の右側に傍線が書かれている。このような書式の不統一は他にも階梯・草稿にともに見られるところである。

以上が、校合の結果である。

3. 成立過程の考察

以上の校合結果から、階梯と草稿の成立過程を考察することにする。前章までに述べてきた前提－草稿から長谷川没後の版まで『日語入門』には本文に大きな変更がなく、また、階梯が1901年刊『日語入門』以降の諸本の原稿と考えることは困難である－から、階梯と草稿の関係については差し当たり次の二つの仮説が成り立つ。一つは、階梯がまず執筆されその後修正を経て草稿となったという成立過程であり、もう一つは、階梯は長谷川が1901年刊『日語入門』以後－従って草稿以降でもある－存命中に何らかの形で『日語入門』の改訂のために作成していた準備原稿であった（が長谷川死没のため使われることがなかった）という可能性である。いずれの

場合にも問題となるのは、楷梯と草稿のどちらが先に成立したかということであり、この点を明らかにするための手続きから考えてみたい。

階梯と草稿を見ると、両者ともに様々な加筆・修正が行われていることが分かるが、草稿では、押紙による修正と－おそらくは胡粉を用いた－白塗りによる修正が多く見られる。これに対して、階梯では押紙による修正は2箇所のみであり、白塗りによる修正については複写のため判別ができない。これらの修正箇所を比較するという方法によって両者の記述を見てみると、草稿に於いて楷梯と同一の語・文・訳語・約物に押紙や白塗りによって書き換えを施したり削除したりしてある箇所が63箇所認められる。³⁾（これらには、処理を施しても変更がなかった箇所や誤字、判読不能箇所がある場合は含まない。）これらのうち、押紙による書き換えは8箇所、白塗りによる書き換え・削除は58箇所である。以下にそれらの例を示す。

例1：押紙による書き換え

楷梯第52課：コノ人ハ新^{アラ}タニ時計屋ノ店ヲ出シマス

（訳文）這個人新開鐘錶舖

草稿第52課：（訳文に押紙）這個人新開^了個鐘錶舖

例2：白塗りによる削除

楷梯第48課：此ノ人ノ丸モキツト的ニ当タリマセウ

（訳文）這個人的彈子也必中靶

草稿第48課：（訳文に白塗り・削除）

ちなみに、楷梯中の押紙による修正2箇所は以下の通りであり、修正後の語・文は草稿と同一である。

1) 楷梯第15課：ノル 騎也 →（押紙で）ノル

乗 乗、騎

2) 楷梯第86課：碁ヤ将棋ハ学生ノスルモノデハアリマセヌ

→（押紙で）生絲^{ゴザ}ヤ花筵^{オモ}ハ広東ノ重ナル産物デアリマス

草稿の文章に刊行された諸本と変更がないことを考えるならば、以上のことから楷梯が先に執筆されて、その後の書き換え・削除等を経て草稿が成立したという順序が考えられる。しかし、これだけではまだ、草稿が先に執筆され、その後草稿自体に修正が施されたものの、新たに楷梯が書き起こされた可能性を否定できない。

そこで、次の検証手順として、楷梯と草稿に－単純な押紙や白塗りによる書き換えではなく－修正や削除に関する明確な指示の書き込みがあるか

ないかを調べ、それらを比較することでどちらの指示がどちらで具現化したかを明らかにすることで前後関係を判別するという手法を採ることにする。但し、この場合もレイアウトに関する指示は除外する。

上記の観点からまず楷梯を見てみると、明確に書き換え・削除の指示があるのは9箇所である。ただ、これらのうち削除指示以外のものは書き換えと言うよりは入れ替え・挿入指示である。それらを以下に順に示す。(番号は前からの通し番号とし、ルビの傍線は省略する。)

- 3) 語彙の部「地理」：「^{カウザン}高山 前後 小山」の上下入れ替え指示。草稿で順序が替わっている。
- 4) 語彙の部「身体」：37番目「^{カミ}髪」及び38番目「^ケ毛」を枠囲みし、両方に「前ニ移ス」と註記した上で4番目「^{ノウ}脳」の次を書き写し、「此二個名詞移シテ脳ノアト顔ノ前ニアルベシ」と書き込み。草稿ではこの通りに移動。
- 5) 語彙の部「身体」：上部欄外に「^{アクビ}〇欠 欠呵 (改行) 打哈息也」と記載があり、111番目「^{シヤクリ}呃逆」の下に「〇」で移動位置を指示。草稿ではこの通りに記載。
- 6) 語彙の部「家具」：上部欄外に「^{スダレ}〇簾 竹簾」と記載があり、27番目「^{ツイタテ}衝立」の下に「〇」で移動位置を指示。草稿ではこの通りに記載。
- 7) 語彙の部「家具」：64番目「^{スリツケギ}摺付木」の下部欄外に「マッチ 同上」と記載があり、「此一ツ摺付木ノ下ニ入ル」と書き込み。草稿ではこの通りに記載。
- 8) 語彙の部「文具」：12番目「^{セキ}書籍」の下部欄外に「^{バコ}本箱 書櫃」と枠囲みし、「此ノ一ツ書籍ノ下ニハ入ル」と書き込み。草稿ではこの通りに記載。
- 9) 語彙の部「農工商具」：上部欄外に「^{グルマ}絲車 紡車」及び「^{クリ}絲繰車 繰車」の2語を併記してその上部に「〇」を書いた上で、22番目「^{イトマキ}糸捲 捲線器」を取り消し線で消し、その下に「〇」で移動位置を指示。草稿ではこの通りに記載。
- 10) 第23課：末尾の文法説明「此^{キョウ}動活字縛、是^シ非不是為主^シ的実字即狗自己動作者、別有主動者相関□、故用アル也 此^{キョウ}動活字追、●是表明為主^シ的実字即狗之行為者、」(取り消し線は原文では塗り潰し、傍点

は白抜き点、□は判読不能、●は塗り潰し解読不可な文字）を枠囲みし、左脇に「刪」（＝さん。意味は「けずる」）と書き込み。草稿ではこの通りに削除。

- 11) 第45課：「アレハ山本サンデアリマス」の下部に記入した説明文「或説姓或説名、只随其時、」を枠囲みし「削ル」と書き込み。草稿ではこの通りに削除。

これに対して、草稿で書き換え・削除が指示されているのは8箇所である。それらを以下に順に示す。但し、草稿の場合には楷梯で挙げた箇所のように具体的な指示が書かれているのではなく、墨で塗り潰してあるのみである。

- 12) 語彙の部「家具」：12番目「箱^{ハコ}」の訳語「箱子」を塗り潰して削除。これは楷梯ではそのまま記載されている。
- 13) 語彙の部「果物」：25番目「落花生^{ラククワセイ}」の訳語を塗り潰して削除。これは楷梯では「花生」となっている。
- 14) 語彙の部「貿易品」：29番目「寒天^{カン} 洋菜」の「洋菜」以外の訳語を塗り潰して削除。これは楷梯では「或魚膠（不是魚肚膠）」となっている。
- 15) 第52課：「店ヲダス 開舗子」の上部欄外に書いた「出ス、新開之意也、」という語釈を塗り潰して削除。これは楷梯にはない。但し、楷梯には草稿の「開舗子」という訳語もない。
- 16) 第55課：「ドコノ（家^{ウチ}ノ）子デアリマスカ」の上部欄外の何らかの註記を塗り潰して削除（判読不能）。これは楷梯にはない。
- 17) 第59課：「アナタハ何処カラ来マシタカ」の上部欄外に書いた語釈「此ドコ又^マ有誰家之義」を塗り潰して削除。これは楷梯では「此ドコ又^マ有●●●●誰家之義」（●は塗り潰し判読不能箇所）となっている。
- 18) 第76課：「アナタハ笛ヲドウシマシタ」の訳文「你笛子怎麼着呢」を塗り潰して削除。これは楷梯ではそのまま記載されている。
- 19) 第81課：「十日バカリ逗留スルツモリデス」の訳文「打算要住約畧十天」を塗り潰して削除。これは楷梯ではそのまま記載されている。

以上から、楷梯に書かれた書き換え・削除の具体的指示は全て草稿で忠実に実行されていることが明らかとなった。他方、草稿の書き換え・削除の指示は、15)、16)を除いて全て楷梯にあるものを削除するよう指示する

ものであることが判った。

15) については、草稿の指示通りに後で楷梯で削除したと考えることが可能であるが、それならば草稿で削除指示されていない「開舗子」という訳語も楷梯に掲載されてよいはずである。それが楷梯にないことから考えると、むしろ長谷川は、草稿で「店ヲダス」を書いた際に当初は「開舗子」という中国語訳と「出ス」の語釈を両方とも記したが中国語訳があるため語釈は不要と考え直して削除したと見るのが適切であると思量する。

16) については、草稿での削除指示が楷梯に反映されたものとするのがまずは至当である。ただ、そのように考えた場合、草稿の他の削除指示との齟齬が明らかにもなる。他の削除指示された語・文が楷梯には存在していることを考え併せると、このみ後で執筆された楷梯に於いて削除された（あるいは削除するつもりで長谷川が指示した）と考えることには困難がある。先述した通り、長谷川の編纂方針－と言うより編集作業・過程－には動揺や一貫性の欠如が認められる点もあるため、ここは、楷梯では書かずに草稿で書き足したものを何らかの事情で削除したと考えることが可能ではないかと判断される。その上で、上述のように、草稿が楷梯に先行した可能性もなお残ることは明記しておきたい。

ここまでの検討から、本章冒頭に述べた二つの仮説については第一の、楷梯がまず執筆されその後の加除修正を経て草稿となったという成立順序が（一部留保を残しながらも基本的には）明らかになった。従って、劉の[1900年刊『日語入門』→『日語入門』草稿→『日語楷梯』→1901年刊『日語入門』]という推定は成立し得ない。劉（2005）については、それが様々な問題点を含むものであることを既に中村（2015）で指摘しておいたが、本人が楷梯も草稿も『日語入門』も実見していることを書いていながら書誌学的・文献学的考証を全く行わないまま妥当性の低い推論を提出している点は当該研究の大きな瑕疵であるとする。

4. まとめ－得られた知見と今後の課題－

前章までの考察を基に、あらためて『日語入門』関連資料の成立過程を整理すると以下ようになる。

1. 1901（明治34）年2月6日以前：『日語楷梯』執筆
2. 1901（明治34）年2月6日以前で『日語楷梯』執筆以降：『日語入門』草稿執筆

3. 1901（明治34）年2月7日：『日語入門』（初版）刊行
（1904（明治37）年3月4日：長谷川雄太郎死去）
4. 1904（明治37）年5月25日：『日語入門』再版刊行
5. 1904（明治37）年12月15日：『日語入門』三版刊行（現物未確認）
6. 1905（明治38）年6月25日：『日語入門』四版刊行
7. 1906（明治39）年1月28日：『日語入門』五版刊行（現物未確認）
8. 1907（明治40）年2月20日：『日語入門』六版刊行

三版、五版の刊行年は六版の奥付からの情報である。また七版以降については現存が確認されていない。

以上の結果を見ると、ここで一つの推定／可能性が想起される。それは、小論第1章で言及した、さねとう（1960：62）が挙げている現在までのところ未確認の1900（明治33）年刊行の『日語入門』とは実は『日語楷梯』が標題を替えて出版されたものではなかったか、というものである。筆者がそのように推定する理由は、表1にも記した「標題が楷梯になく草稿にあり」及び「編著者が楷梯になく草稿にあり」という二つの相違点と、『日語楷梯』のページ数にある。

既に述べたように『日語楷梯』は最終ページに「日語楷梯完」と書いてあるのみで表紙には何も書かれていない。また編著者の記載もない。これに対して、『日語入門』は草稿の段階から標題があり、また「広東同文館編」という編者名も記載されている。さらに言うと、この「広東同文館編」は押紙に書かれたものであり、押紙の下＝最初に書かれた修正前の編者名は「広東同文館東文教習長谷川雄太郎編」となっている。⁴⁾

そして、既述の通り『日語楷梯』は、『日語入門』にはある第87～90課までがなく、その分だけページ数が少ない。さねとう（1960：62）は、1900（明治33）年刊行の『日語入門』についてページ数が109丁であることを述べる一方、編者・発行所については「（広東同文館？）」と曖昧な記述にとどめている。現在見られる『日語入門』初版は本文が134丁であるから、1ページの行数の違い等があるとしても、末尾の4課がなければ109丁というページ数になる可能性があり、また、編者・発行所名を特定できなかったのは『日語楷梯』に見られるように標題・編者名がなかったからではないかと考えられる。とすれば、上述の、『日語楷梯』が1900（明治33）年刊行の『日語入門』（の实体）であったという推定／可能性は成立する－そこまでに至らなくても検討する－余地はあるのではないかと思量する。

『日語入門』をめぐる課題については、中村（2015：20）に：

- a. 長谷川本を含めた『日語入門』諸本の書誌学的・文献学的分析
- b. 吉岡（2002）の考察を引き継ぐ、現代日本語教科書の“源流”としての『日語入門』の特長の分析
- c. 『日語入門』草稿に見られる修正箇所の洗い出しと修正点の考察を通じた長谷川雄太郎の教科書作成方針の解明
- d. 長谷川家所蔵の諸史料、特に『日語楷梯』との比較による『日語入門』成立過程の解明

の4点を挙げておいたが、小論は、これらのうちdについて一応の解答を示したことになる。現在では魏（2016）が音声教育面から『日語入門』の指導法にアプローチしており、長谷川研究あるいは清末日本語教育史研究はさらなる展開を示しつつある。これらの成果をも踏まえながら、a～c及び未確認史料である三版、五版の探索については引き続き今後の課題としたい。

謝辞

小論執筆に当たり、多年にわたり多大のご指導を賜った長谷川家現当主で長谷川雄太郎ご令孫の長谷川英之先生・文子様ご夫妻には心から御礼を申し上げます。また、資料・情報のご提供に与った東京都立中央図書館特別文庫室と、中村（2015）に貴重なご助言をお寄せ下さいました早稲田大学名誉教授・吉岡英幸先生、長谷川雄太郎研究について知見を交換する機会を与えて下さった広島大学大学院生・魏維氏にも併せて深甚の謝意を表します。

註

- 1) 日本国内で存在が確認されている『日語入門』は以下の通りである。

	所 蔵 先	版	発行年月日
1	長谷川家	草稿	— —
2	長谷川家	(初版)	明治34年 2 月 7 日
3	東京都立中央図書館実藤文庫	(初版)	明治34年 2 月 7 日
4	北海道大学附属図書館札幌農学校文庫	再版	明治37年 5 月25日
5	中村重穂（筆者）	四版	明治38年 6 月25日
6	富山大学附属図書館梶井文庫	六版	明治40年 2 月20日

- 2) これについては、東京都立中央図書館実藤文庫所蔵本のみ語彙の部の「方角」の末尾に、草稿にも他の版にもない「南北」が記載されているが、これは中村（2015：21）註5）で述べた旧所有者の書き込みではないかと思われるものであるため、除外している。
- 3) さらに綿密に見ると、楷梯の文を書いた上で草稿で一度手を入れ、その後上から押紙を貼って三段階の修正を施しているもののがかなりある。これは、草稿で既に同一文ではなくなっていると判断し、ここでの計数からは除外してある。以下のその一例を示す。
- 楷梯第46課：明日ハ天氣ガ晴レマセウ （訳文）想明日得天晴
→草稿第46課：（訳文を修正）想大可以明日得天晴了
→草稿第46課：（訳文に押紙）明日天可以晴了
- 4) この編者名の変更理由は不明である。

参考文献

- 魏維（2016）「清末日本語教育における音声教育についての研究」『日本語教育』164号 日本語教育学会 pp.34-49
- さねとうけいしゅう（1960）『中国人日本留学史』くろしお出版
- 中村重穂（2015）「長谷川雄太郎研究序説－『日語入門』諸本校異に基づいて－」『北海道大学留学生センター紀要』第19号 北海道大学国際本部留学生センター pp.1-23
- 吉岡英幸（2002）「明治期の語法型教材」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』15 早稲田大学日本語研究教育センター pp.133-146
- 劉建雲（2005）『中国人の日本語学習史－清末の東文学堂－』学術出版会

なかむら しげほ（国際教育研究センター准教授）

A study of Hasegawa Yûtarô based on the collation of
Nichigo Kaitei (Introductory Steps to Japanese) and the
draft of *Nichigo Nyûmon (Introduction to Japanese)*

NAKAMURA, Shigeho

This paper aims to clarify the publication process of two Japanese textbooks *Nichigo Kaitei (Introductory Steps to Japanese: NK)* and the draft of *Nichigo Nyûmon (Introduction to Japanese: NN)* written by Hasegawa Yûtarô, a Japanese teacher during the Late Qing Dynasty, through bibliographical analysis and examination.

In an earlier study, Liu (2005) argues that the draft of NN was written prior to NK and that NK is a revised version of NN. In order to test these findings, the present study picks up differences between both texts and examines the notes for associated changes and deletions. The study finds that the notes in NK were all followed in the draft of NN, whereas the notes in the draft of NN were followed with two exceptions. The study indicates a possible interpretation that Hasegawa intended to delete these two points in the editorial process of the draft NN.

From these investigations, contrary to Liu's findings the study concludes that NK is prior to the draft of NN.

In addition, based on the absence of a page total, title and author/editor's name, the study points out the possibility that NK is the undiscovered NN published in 1930 reported by Sanetoh (1960).

As future research issues, in addition to examination of this possibility, searches for further versions of the textbook and additional bibliographical research are needed.